

プロジェクト開始当初のインド人研究者

2011 年 12 月

山田浩司

インド側政府機関がいずれも資質にすぐれた研究者を擁し、日本のすぐれた技術を理解して、それを南インドの気候風土に合った技術に応用するための研究を実施して農家に普及を図っていく能力そのものが高かったかという、そうではない面も垣間見える。

第 1 期に短期専門家としてバンガロールの蚕種技術ラボ (SSTL) 派遣された今西重雄は、現地側カウンターパートと初めて会った時、その仕事ぶりに戸惑いを感じたという。地元マイソール大学の大学院を出て SSTL に入所したというそのカウンターパートは、頭脳は確かに優秀だったが、教えられたことを自分では実践せず、それを現場の作業員に言葉で指示してやらせていたと述懐する。「日本だったら高級技術者でも桑の刈り取りは自分でやるんですけどね。」

インド人研究者が研究を一方向のみに向かって進める傾向も強い。日本なら日本種と形質の相異なる中国種も同時に系統育成し、日本種を主体にしつつもそれに欠けている強健性や繭層重は日本種とは別に系統育成された中国種から導入するといった幅広い選択肢から柔軟に検討するという方法がとられている。しかし、第 1 期に現地を訪れた JICA 調査団によると、プロジェクト開始当時のインドでは、導入された日本種に対して掛け合わせることができる優良な中国種が育成されていなかったという。

第 3 期に短期専門家として数回にわたって現地を訪れた河原畑勇は、九州大学に籍を置く研究者の視点から、配属されたマイソールの中央蚕糸研究訓練所 (CSR&TI) の若手研究員の印象について次のように述べている。

本プロジェクトに関する限り、カウンターパートの平均的教育レベルは例外的といえるほど高く、そのほとんどが博士号取得者である。一方、これはインドの高等研究教育の根幹に関わる問題であるが、博士号取得者でも全体的にオリジナリティを追究し尊重する気風に乏しく、新しいアイデアにもとづいて問題解決を図る場面がほとんど見られない。その結果、JICA 専門家が提案する問題解決のアイデアに対し、それを批判的かつ客観的に評価することなく、単に受け入れて協力しているのが普通である。

前述の SSTL 同様、CSR&TI も地元大学出身者を研究員として受け入れているが、彼らは 1 日中パソコンの前に座っているだけで、実験をやってデータを集めてこない。河原畑は、

それでどうやって研究ができるのか気になったという。また、多くの研究員が位相差顕微鏡など精密機械の操作方法をよく知らない様子でもあったという。

創設が 1981 年と比較的新しい中央製糸技術研究所（CSTRI）については、プロジェクト開始当初、研究員が研究の進め方を知らない様子であったことも指摘されている。

プロジェクト第 1 期前半に短期専門家として派遣された高林千幸は、バンガロールにある CSTRI を拠点に南インド製糸業の実態調査を行い、当時各州政府が運営していた繭市場を視察しているが、そこでは、買い手である製糸業者が繭の手ざわり（繭の硬軟、重さ、大きさなど）と視覚（不良繭の混入具合、繭の大きさ、繭の揃い具合など）によって繭の質を評価し、これが競売時の繭値設定の判断基準になっているという非科学的な繭質評価が行われていると指摘し、繭質評価法の策定と繭検定の制度化を提言した。この評価法の策定では CSTRI が中枢的な役割をになうべきと彼は考えていたが、設立後間もない CSTRI の実施体制には、いくつかの課題もあると当時指摘している。

例えば、CSTRI の製糸研究セクションでは、日本と違ってセクション全体で 1 つの研究室という構成になっており、その役割分担が外部者から見て不明確だったという。1 つの調査や試験に対して全体で対応していくような体制となっていて、個人的な研究意欲や競争意識の高揚には欠ける面も見られた。また、当時 CSTRI 製糸研究セクションが取り組んでいたテーマはいずれも調査であって研究の域まで達していなかった。これは、これまでの研究蓄積が少なく、研究者も若くて指導者もいないという環境だったことによるものであろうと高林は言う。

CSTRI は設立されたばかりの施設で、製糸に関するこれまでの研究蓄積は全くなく、本当にこれからが出発点という感じでした。したがって、何を研究したらいいのかわからないという感じで、日本の研究レベルからすると 50 年前という感じを持ったのが第一印象でした。その後 16 年の間に、2 回訪れ、また他の指導者も行き、研修生を受け入れる中で技術レベルも向上するのが目に見えて判るようになりました。

（高林千幸専門家インタビューより）

高林や同じく第 1 期、第 3 期に短期派遣された木下晴夫らが国内で所属していた蚕糸・昆虫農業技術研究所松本支所製糸試験部では、16 年間の協力期間中、8 人のインド人技術研修員を 3 ヶ月から 1 年の期間にわたって受け入れ、主に製糸技術について指導を行っているが、その中から 2 人、その後インドの大学において博士号を取得した研究者を輩出している。高林によれば、こうした研修員のほとんどが、日本に来たばかりの頃は何もわからず、研究もどのようにやったらいいのかを理解していなかったという。

インドには蚕糸業に関する学会はなく、研究発表は一部の研究雑誌や研究所年報に報告されるしか途がない。シルクに関しても、今後学術的・実用的研究を進めるためには、製糸・用水・織物・染色関係を含めた学会を発足させ、CSTRI が中心となって研究者の意識高揚と討論の機会を多くすることが肝要だと高林は 1992 年に報告している。そうした学会は 20 年近く経た現在も設立されていない状況だが、研究者の層は少しずつだが厚くなりつつある。

第 1 期に今西を戸惑わせた SSTL のカウンターパートも、日本での技術研修で同様の「洗礼」を受け、自分で手足を動かすようになった。今西はプロジェクト第 2 期の半ばに JICA 調査団の一員として、さらに第 3 期開始時には研修の短期専門家として南インドを訪れているが、その頃になると、彼のカウンターパートは国家蚕種製造計画（NSSP）の製造部門のリーダーとして、見違えるような働きを見せていたという。

【参考文献】

国際協力事業団 1992、『インドニ化性養蚕技術開発計画打合せ調査報告書』、平成 4 年 6 月
河原畑勇 2005、『平成 17 年度（2005）専門家業務完了報告書』、平成 18 年 1 月 24 日